装幀家が絵本をつくること

中嶋　香織

好き嫌いの多い子どもだった。嫌いでないものをあげた方が早いくらいの、嫌いなもののオンパレード。そのくせ、「嫌い」を表せば、食べなくてよいことになるだろうと信じる根っからの楽天家でもあった。母の目の前で、口にしたものをそのままだらりと吐き出すということを思いついたときは、その効果を想像してほれぼれしたのもそのせいだ。そんなことをすれば、料理を作った本人を怒らせるだけになるということを当時の私は気づいていなかったのである。そして、母の鉄壁は崩れなかった、それどころか堅牢になった気さえする。食べなさいの一言と、無言の圧力。結局いやいやながら食べることになったのだが、「嫌い」という大きな感覚が理屈に簡単にねじ伏せられてしまった不本意さに、納得できずわァわァ言っていた。

それ以来だ。自分にとって重要なことが、どうも世の中では受け入れてもらえないらしいと感じ、自分の中の絶対と、世の中の要求との間で葛藤する子になったのは。これが社会のなかで感覚的にものを作る、デザイナー人生に播かれた最初のひとつぶである。

食べものの好き嫌いが多いということは、ものごとの好き嫌いも多い。言わずもがな、絵本に関しても。幼少の頃は、美しく洗練された色使いの絵本に心地よさを、色や形ののびやかな絵本に純粋な喜びを感じ、身的なわけでもなく、「嬉しい気持ち」を子どもたちにと、ポカンとただ思っている。それだけなのである。

グラフィックデザイナーとしての経験を積み重ねるにつれ、人が受ける印象、快・不快を形作る要素が理解できるようになり、幼年時代のぼんやりとした記憶の中にある動かしようのない感覚と、その向こう側にあるものがわかるようになってきた。そんな時、赤ちゃん向け絵本のきっかけをいただいた。

相手は赤ちゃんである。手強いが、不足はない。さあこい赤ちゃん、おてやわらかに頼んます。わかりやすさを求めるなら、記号的な絵がいいだろう。ただ、記号的な表現は、表面的な印象づくりを得意とし、赤ちゃんみんなが持っているような本質的なかわいさや、優しさや温かさ、柔らかさなど「感情の奥に働きかけてくるもの」にはちょっと届かない。線を単純化する過程で、その魅力と相反して、情緒性や奥行きなどを失っていく傾向があるのだ。フォルムとしてのかわいさや明るさ、洗練、わかりやすさという記号的な表現を押さえつつも、この絵本を作る時には「感情の奥に働きかけてくるもの」が欲しかった。理想とするのは、「おいしそう」とか「触りたい」とか、生きもの自体の感覚にふれるような、見た時に心が嬉しくなるような表現。文化を身にまとう前の赤ちゃんにとっての心地よさだ。満月の輝く明るい夜空と、その空にうかぶ、たまごとミルクのようなおつきさま。穏やかな眠りにつく動物たち。リズムよくころがる言葉。そうしたものの集合が、この絵本の「嬉しさ」を作るひとつひとつの要素になってくれるのではないかと思う。

子ども時代の自分が喜ぶような「嬉しさ」があればいい。そんな絵本に少しでも近づけただろうか。

©中嶋大助

なかじまかおり作
B5変判・24頁・893円
岩崎書店
978-4-265-08202-5

★なかじま・かおり氏は装幀家・絵本作家。多摩美術大学デザイン科インテリアデザイン卒業。二〇一〇年第四十四回造本装幀コンクール国民読書年特別賞受賞。二〇一一年『おつきさま　なにみてる』岩崎書店より刊行。